

# コミュニケーション行動の基礎と障害、その支援方法

林 安紀子

(東京学芸大学 教育実践研究支援センター)

**要 旨：**本講演では、コミュニケーションのプロセスを解説し、成人におけるコミュニケーション障害の理解と支援について考えた。コミュニケーション障害の実態を把握するためには、本人の諸能力（感覚・運動・認知・対人関係など）のアセスメントを行うだけでは不十分である。本人の生活の場や暮らし方など環境のアセスメントを行う必要がある。さらに、見落としがちであるが、支援スタッフ側のコミュニケーション能力について客観的にアセスメントすることが大切である。コミュニケーション支援においては、本人にとって理解しやすい支援方法と表出しやすい支援方法の両面を考える必要がある。個々の能力や興味・関心に応じたコミュニケーション支援を行うためには、本人と支援スタッフの間で常にコミュニケーション手段やその方法についてのトレーニングを行いつつ、より内容の濃い伝え合いを実現していく工夫と、努力が必要である。

**Key Words：**コミュニケーション行動，コミュニケーション支援，アセスメン

コミュニケーションの定義というのは非常に難しいが、コミュニケーションを考えると大事なことの1つめは、人に対して興味、関心、愛着や信頼といったものを感じたり抱いたりするかどうかということだと思う。これは、重度の障害をもつ人であっても、生まれたばかりの赤ちゃんであっても同様である。ともすると、「コミュニケーション＝言葉」というように考えがちであるが、言葉のようなシステムをもたなくても、あるいは言葉のようなシステムを発達させるためにも、一番大事なことは誰かと一緒にいると楽しいとか、一緒にいると落ち着くとか、誰かと一緒にいて安心するとか、そういった気持ちをもてるかどうかということである。さらに、人は一人では生きられないので、必ず社会の中でいろいろな人たちと折り合いをつけて生きていくことになる。その際、コミュニケーション行動というのは、自分の要求を満たすために誰かを使って環境を変化させる手段もしくは技術であるという捉え方でもできる。ただ、これは一方的に誰かに命令してや

らせるということではなく、やはりそこには双方向のやりとりがある。自分も誰かに何かをしてもらうけれども、自分も誰かのために何かをしてあげるといったギブアンドテイクの関係だとか、ソーシャルスキルのような技術というのでも、コミュニケーションの中に入ってくる。

またもうひとつの観点としては、他の人と情報を交換する手段・技術といった捉え方である。色々な学習にしても知識を得ることは1人ではできない。ここで言う知識とは、生きていくためのいろいろな知識という考え方もできるし、仕事とか自立とか余暇とか、いろいろな生活の中で自分がより快適に生きていくための情報と捉えることもできる。コミュニケーションとはこのような知識をいろいろな人と交換し合うことができる手段・技術ということもできる。コミュニケーション障害をもつ人たちからみれば、そのようなコミュニケーション行動や技術を獲得し、促進していくことによって、それが自己実現や社会参加につながり、自立のための手段・技術としていかされていくという考え方ができると思う。

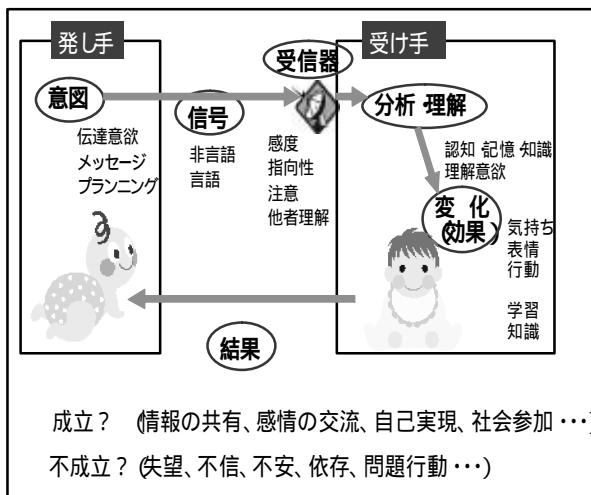


Fig. 1 コミュニケーションのプロセス

コミュニケーションというのは発し手がいて、受け手がいる (Fig. 1)。少なくともそのような関係がある。受け手がたくさんの場合ももちろんあるが、今はとりあえず、発し手と受け手の1人ひとりの関係の中でみていくことにする。どういう意図かはわからないが、発し手が何らかの意図を相手に伝えるときには、伝えたいという意欲がないと、もうこの時点でコミュニケーションは成立しない。特に重度の障害者の中には、このような誰かに何かを伝えたいという意欲自体が非常に弱い人たちがいる。そうすると、意図を伝達しようという段階でつまづきがあるということになる。コミュニケーションを成立させるにはまず伝達意欲があって、その意欲に応じてメッセージや意味を、相手にわかるような形で発信しなくてはいけない。つまり、メッセージを組みたてたり、たとえば音声言語で出すのであれば、口による息の調節であるとか、舌の動かし方であるとか、唇の動かし方とか、そういったもの全てをひっくるめて運動をつくったりしなければならない。それが手話であったら、手の動き、指の形といった、運動のプランを立てなくてはいけない。このように何らかの形の信号を相手に発信するわけである。

発し手が信号を発信したあとで大事になるのは、受け手がその発信した信号をちゃんと受けとめてくれるかどうかである。私たちがもっているアンテナにはどんなものがあるかということを考えてみよう。たとえば私が誰かに話し言葉で伝えようとするれば、発しているのは音声である。従って、聞いている人の受信機の主なものは聴覚になる。だからまず、聴覚がどうか、耳の聞こえがどうかということが大事である。それから指向性が関わってくる。指向性と

というのは、受け手が発し手の話を聞こうと思っているかどうかということである。別の言い方をすれば、注意という言い方ができる。誰に、どんな情報に、アンテナを向けているか。そういった指向性の問題がある。障害のある人の中には、指向性に非常に偏りがあって排除するものと受け入れるものとがきれいにばかっと分かれている人がおり、そういう人の中にはその人の好きなものしか入っていかない。一緒に同じ状況にいても、同じ生活をしていても、私たちと比べて知識として積みあがっていく情報に偏りのある人が多くいる。これも、最初の受信機のところでの選別になってしまっている場合である。それから他者理解というのがある。たとえば、私が何のことについて話をしようとしているのか、「あれを見てください」と指をさしたときにそのさした方向をきちんと見てくれるかどうか、それから自分が考えていることと相手が考えていることは違うんだということきちんと認識できているかどうか、相手の立場に立って考えてみるとどうかといったことである。このようなことを理解するための準備性が受け手側にあるかどうかが大変である。そういったアンテナを通して、情報というのはもしかしたら発し手が意図しないような形になって受け手の中に入っていくかもしれない。そのように入ってきた情報を、さらに受け手は自分の持っている認知の枠組みとか知識とかの中で分析して、それをある程度噛み砕いて理解し、理解した結果として何かしらの変化が起こるわけである。それが気持ちの変化になったり、表情の変化になったり、行動の変化になったりという形で外に出る場合もあるであろうし、外には見えないかもしれないけれど、それが学習とか、知識の積み上げとかという形で残っていく場合もあると思う。このような形で発し手が送った信号が受け手の中で受け取られ、発し手が意図したとおりに伝われば、コミュニケーションが成立したというわけであるが、発し手が意図したとおりに相手に伝わらなかった場合には、コミュニケーションのプロセスとしては不成立ということになる。コミュニケーションが成立すれば、情報の共有とか、感情の交流とか、自己実現とか、社会参加などという、かなりポジティブな効果が出てくるが、不成立の場合には、失望とか不信とか不安とか依存とか、さらには問題行動というような形が現れてくる。これは受け手の側だけにおきるのではなく、こういったプラスの面マイ

ナスの面というのは、発し手でも受け手でもどちらでも起こりうることである。そういうところをおさえておく必要がある。

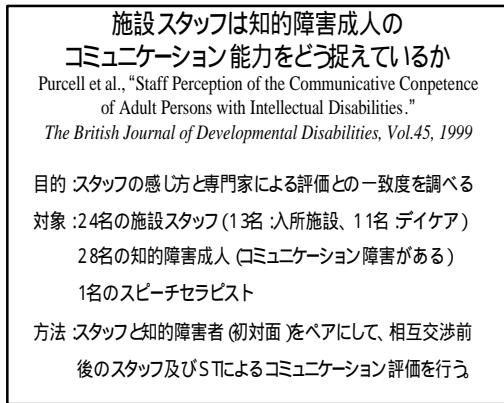


Fig. 2 研究紹介

イギリスにおける研究に次のような研究があった (Fig. 2)。知的障害の成人の施設のスタッフが知的障害成人のコミュニケーション能力をどのように捉えているのか、というような研究である。このような研究はいくつかあるのだが、大体結果の傾向としては同じなのでひとつ紹介する。これは、スタッフによるコミュニケーション行動の評価がどの程度一致しているかということ調べたものである。先にアンテナの話のところで述べたが、感覚の障害があるかどうかによってコミュニケーション能力は大きく違ってしまふ。そのような意味では、視覚とか、聴覚とかの障害にどの程度スタッフの気づきがあるかどうかということが重要になってくるのであり、そこを調査しているわけである。そうすると、スタッフが利用者の耳の聞こえに問題はないと判定した率と専門家がみて聞こえに問題がないと判定した率においては、同じ人たちを見てもらった結果でも違いが出てくる (Fig. 3)。一般に知的障害の人たちは健常の成人よりも聴力に問題がある割合が高い。ところが、スタッフが普通に接して、普通の行動観察をしているだけでは見逃されてしまうというようなことがある。

利用者の聴覚OKと評価した割合

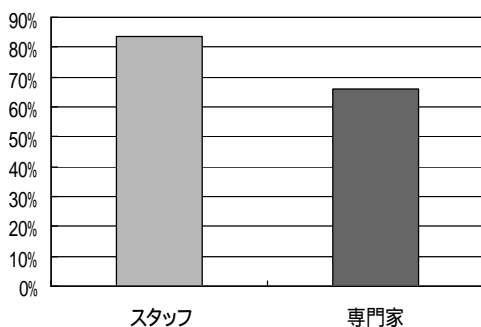


Fig. 3 スタッフ/専門家 評価の違い

次に示すデータは、それぞれの利用者がどの程度スタッフの言っていることをわかっているかという、受け手としての利用者の言語理解力をスタッフがどう捉えているかというデータである (Fig. 4)。これもスタッフと専門家の判定を比較してみる。そうすると、スタッフには利用者が4語文以上の難しい文章も理解できているという判定をしている人が非常に多い。しかし、言語の専門家の目から見ると、せいぜい2、3語文くらいの理解にとどまっていたり、1語文くらいの理解しかできない人もいたようになり、スタッフと専門家との間でかなり評価の違いが大きい。

利用者の言語理解力評価の違い

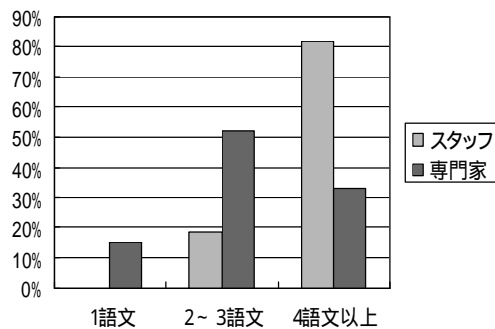


Fig. 4 スタッフ/専門家 評価の違い

これは音声言語、言葉がある程度使えるかどうかというところでの観察であるが、コミュニケーションの場合には言語だけではなく、非言語的な手段というのも非常に有効である。そのあたりのところについても評価を比べてみた (Fig. 5)。非言語的な手段の観察項目として、接触、ジェスチャー、頷き、表情という4つの観点の設定された。こうなると、実際に触られたり触ったりするというのはスタッフも専門家もはっきりそうだとすることで判定が一致してくるが、たとえば、利用者がどの程度表情を使いながらコミュニケーションしてきているかということに対しては、やはりスタッフたちの気づきというのは少し専門家に比べると感度が低いようだ。ただし、利用者が言葉を使ってコミュニケーションを仕掛けてきた場合というのは、スタッフもそれをちゃんと受け止めている。ただその場合、コミュニケーションの機能 - 要求される場面、質問される場面、叙述的な場面 - でわけてみると、利用者がスタッフに言葉で要求してきたときには、スタッフはみなきちんとわかって答えることができるし、また利用者が質問してきたときにもある程度答えることができる。しかし、利用者がスタッフに叙述的に何かお話をしたいとい

うときには、スタッフの感度が少し落ちてしまうというようなことがこのような結果からでてきている。

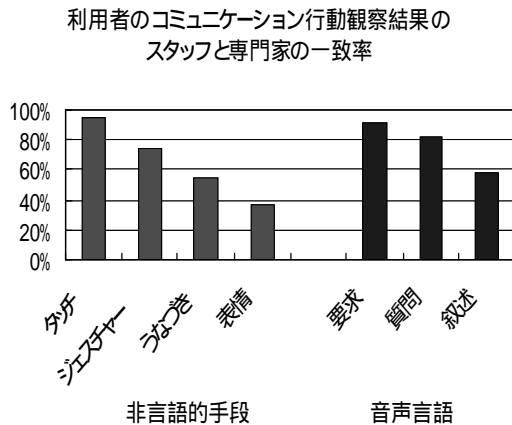


Fig. 5 スタッフ / 専門家 評価の違い

利用者がどのようなコミュニケーションの問題をもっているのかということ、スタッフの側から考えてみると (Fig. 6) 先に述べたようにスタッフは利用者の言語理解はある程度以上の能力があると考えている。多くのスタッフがコミュニケーションがうまくいかないのは、利用者側の発音の明瞭度が悪い、発音がはっきりしないからであるというように考えている。スタッフは、利用者の言語理解面はそれほど問題がないという捉え方をしがちであるという結果である。

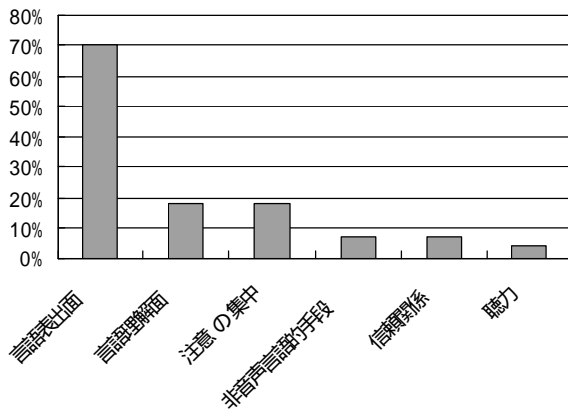


Fig. 6 スタッフからみた利用者の  
コミュニケーションの問題

この研究で示唆されたことをまとめると、スタッフによるコミュニケーション行動評価の傾向は、聴覚や視覚障害を見逃すことがあるかもしれないということ、音声言語の理解能力を過大評価しがちであるということ、利用者の表情とか非言語的信号を受け取るのが苦手なスタッフもいるようだということを心に留めておく必要がある。また、これは研修等で磨いていくしかないと思うが、利用者からの音声言語

による叙述的なメッセージを受け取るのもスタッフは苦手な傾向があるということである。さらには、利用者のコミュニケーションが改善した場合、その理由を利用者自身が慣れてきたとか、仕事を覚えたとかといったように利用者自身の能力が変化すると捉える傾向があり、スタッフ側が歩み寄ったから、環境が改善されたから、色々なコミュニケーションシステムを使ったから、などスタッフ側の要因として捉えない傾向があると指摘されている。

次に、たとえばある状況を描いた絵を知的障害の人に見せて、「これには何が描いてありますか」ということをきいてみる。状況を説明することは、知的障害のある人たちはとても苦手である。まったく説明できない人もいるのであるが、ここでAさんという知的障害の方の説明を紹介する。Aさんは、言葉はよく出ていて文法的にも正しい言葉をお話すのであるが、内容について特徴的なところがある。次の会話は、ブランコに乗っている女の子とそのブランコの鎖をひっぱって横取りしようとしている男の子という状況が、表情とか場面設定とかでわかる絵を見せた場合の会話である (音声が会場に流れる)。

林「これはなにしてるところ？」

A「ブランコ」

林「ブランコの絵だね。そうですね。この子なにしてるの？」

A「こいでる。」

林「こいでるの。あーそっか。押してあげてるんだね。」

Aさんは、「こいでる」と言いながらブランコを押す動作をしているのであるが、後で確かめたところ、「意地悪な子はいら？」と聞いても、「いない」と答えており、やはりいじわるされているという状況があまり理解できていない。

次の状況画は、バスが行ってしまっ、1人の子どもが転んでいるという場面なのであるが、それをAさんがどのように説明したかという、

林「これはなにしてる？」

A「ひかれました。」

林「ひかれちゃったの？なにに？」

A「自動車に。」

林「自動車にひかれちゃったの？あ、この子が？」

A「はい。」

林「ああ、大変だ。」

A「飛び出したから。」

Aさんは、「飛び出したから」というように、理由もきちんと答えられている。だから、言語としてはよく伝えているのだが、状況が理解できていない。したがって、おそらく実生活ではいろいろな場面の受け取り方が私たちとは違うのであろうということが考えられる。そういったところで、いろいろな誤解が生じたり、友人関係がうまくいかなかったり、仕事がうまくいかなかったりということが起こってくる可能性がある。

今度はBさんとの2台の自動車が衝突している絵をみながらの会話である。

林「これは何？」

B「自動車。」

林「自動車ね。自動車がバーン。」

B「バーン。」

林「ぶつかっちゃったね。」

B「ぶつかっちゃったね。」

林「交通事故。」

B「交通事故。交通事故」

林「そうそうそう、交通事故。これは誰？」

B「警察。」

おうむ返しで言っているのだが、タイミングとしてはとてもよいタイミングであるし、発音の明瞭度も高い。ただ、まったくのエコラリア的なものではないということは、たとえばこの人の場合、知っている単語を絵カードで指差して「これ何？」と聞くと、ちゃんと答えられるということからわかる。検査者はそれまでは手を動かさずに話をしていたのであるが、警察官のところを指差して「これ誰？」と聞いたときには、被験者はそれにきちんと注目できている。したがって、共同注意はできている。指差したところを見て、それに答えるということはできるので、Bさんは物の名前については答えることができるのだけれど、状況についてはなかなか自分で表現ができならしい。ただ、タイミングとしては非常によいタイミングで言葉を発するので、何かすごく通じ合っているようには聞こえる。しかし、実はBさんはまだまだ言語としての概念というのが捉えきれておらず、状況を説明するほどには育っていない。

もうひとりCさんを紹介する。この人も自閉的な傾向のある人であるが、絵にずっと見入ってしまって、途中から何か興奮したようであるが、なかなか質問に答えてない。ただ、耳をすませてじっと待つと何か言っていることがわかった。

林「車が。車どうしてるの？」

C「・・・・」(意味不明な囁き声だが、やがて「じこ、じこ、じこ」と言っているのがわかる)

林「事故になってるね。車がバーンとぶつかってね。事故になっちゃったね。」

C「・・・・じこ、じこ、じこ、じこ・・・・」(どんだん声が大きくなる)

林「大変だ。」

C「・・・・」(意味不明な囁き声)

林「この人誰？」

C「・・・・」(意味不明な囁き声だが、やがて「おまわりさん、おまわりさん」と言っているのがわかる)

林「うん、おまわりさんね。」

C「・・・おまわりさん、おまわりさん、おまわりさん、・・・・」(どんだん声が大きくなる)

決して自分の世界に入っているわけではなくて、こちらの質問についてはしばらくしてからきちんと答えていて、それを検査者が汲み取ると声がどんどん大きくなっていき、うなずきも出てくる。そのようにコミュニケーション意欲は非常にあるのだけれども、その汲み取り方というのがやはり難しい。先にも述べたように、色々なコミュニケーションのパターンの中で、今紹介したタイプの人たちのメッセージをどうやって拾っていくか、それからそのメッセージをどのように正しい理解に導いていくかという問題は、日常生活の中で支援者が1番よく経験していることだと思う。

今ここで私が考えているコミュニケーション支援というのは(Fig.7)まず本人がどういう理解をしているのか、すなわち世界をどういう風に理解しているのかということ、それからどういう風に人とのかわりをもとうとしているのかということや、人に対して興味をもっているのかということなどの、本人自身のアセスメントをすること、それから、周りの環境がどれだけ本人の理解を助ける環境となっているかどうかという環境のアセスメントをすること、それから、汲み取るべき、受け手である私たち支援者、もしくは発し手である私たち支援者が、どういう感受性をもっているか、どういう知識をもっているか、どういう接し方をしているかということのアセスメントをセットにして考えていくものである。このようなことが、コミュニケーション支援の第1歩として大事なことではないかと思う。その上で、成人の障害者だとこれからのトレーニングは難しい

という考え方もあるかもしれないが、コミュニケーションに関しては常に発し手と受け手との双方の間でのトレーニングが必要になってくる。それは本人への直接的な指導であるかもしれないし、もしくは家族への直接・間接的な指導かもしれない。または、実際に関わっている支援者がさらにその上の達人を探して、その人たちに教えを請うというような、支援者へのコンサルテーションというのもあると思われる。それから、環境調整ということも含めて行い、その効果がどうであったかを調べることで自体がコミュニケーション支援であると考えてもいいのではないかと思う。

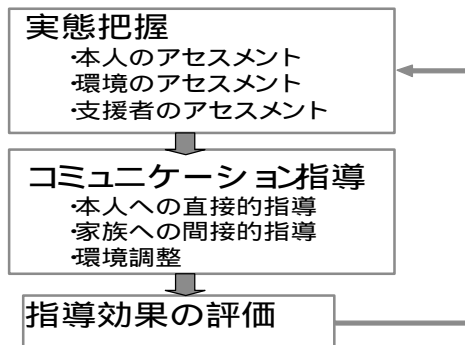


Fig. 7 コミュニケーションの支援とは？

アセスメントという話であるが、まず本人の要因としてどんなことが考えられるだろうか (Fig. 8)。まず、言語や非言語的な刺激を受け取るための感覚、最初の窓口である、目とか耳とか、触覚とか嗅覚とか、すべてが私たちのアンテナである。そういった感覚、知覚能力について、その人がどういう特性をもっているのかということを知ることが大事なことである。しかし、大人になるとなかなかこういうことをしなくなる。目の検査とか、耳の検査とか、にの検査とかをしなくなってしまう。しかし、実際には私たちでも老化に伴って、耳の聞こえ、目の見え方というのはどんどん変化していく。もちろんそれは知的な能力についてもそうであるが、そのような年齢変化というのをやはり把握しておくことが大事ではないかと思う。

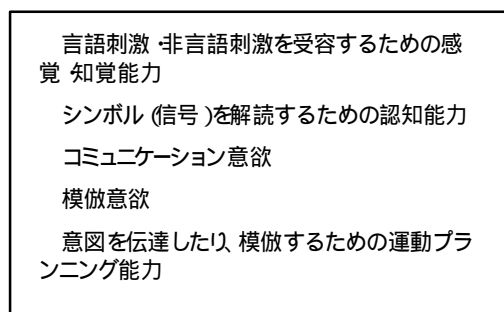


Fig. 8 本人の要因

こういったアセスメントというのも、できれば定期的に行なっていくことが望ましい。

2番目にシンボルとか信号だとか - ある意味では言葉といってもいいかもしれない - を解読するための認知能力あるいは知的な能力がどの程度のレベルなのか、どのくらいの発達段階にあるのかということも把握することも大事なことである。3番目に、コミュニケーションしたいという気持ちである。人に対して何かを伝えたい、人の言うことを理解したい、誰かと一緒にいたい、誰かとやりとりをしたいというコミュニケーションの意欲がどれくらいあるのかということも調べる必要があるし、その意欲がもし非常に読み取りにくい人や、弱い人がいるのであれば、そこからまず私たちはアプローチしていく必要がある。

次もコミュニケーションを円滑にするため、そして発達においても大事な、模倣意欲というのがあり、これはまねっこをすることである。言葉が自分で使えるようになる前の子どもたちがどんなことをするかというと、とにかく大人のやることをまねしまくる。もともと私たちは、生まれつき - 生得的な動因という言い方をするのであるが -、人のやっていることを模倣したいという意欲を強くもっている。そのためにわれわれ人間は言葉というシステムを獲得できたのだという話もある。ただし、こういう模倣の意欲が弱い人というのもある。模倣の意図や自分の意図を伝えたいという意欲があっても、麻痺があったり、色々な障害があったりして、模倣するための運動をプランして実行する力が弱い人たちというのもある。そういう人たちの場合には、運動能力がどのくらいあるのかというようなことも本人のコミュニケーション意欲を知るためには必要なことになる。

たとえば視覚の話であるが、ただ見ればいいということではなくて、形の見分けがどれくらいつかかというのも大事なことである。たとえば、新版K式の発達検査にあるものとして、同じ形のところにカードを置けるかという課題がある (Fig. 9 左)。この課題ができるようになると、形を見分けてその形を探すという課題が出てくる (Fig. 9 右)。同じ形を探すということでは同じ課題なのであるが、最初の課題と次の課題は非常に違う点がある。いろいろな意味で違う。たとえば、最初の課題は非常にコントラストがはっきりしているし、図も大きい。しかし、次の課題は線画なので、図と地の関係があまりよくわからない。選択肢も、少ないもの

から多いものになるし、図形の形もいろんな要素がはいつて複雑な形になっている。たとえば手話とか文字とか図形シンボルとか、そういうものをコミュニケーションの道具として使いたくなった場合には、今紹介した形の見分けとか、選択肢の数とか、図と地のコントラストとか、そういうことがどの程度理解できているのかということ把握しておかないと、その人に最適なシンボルのシステムを選ぶことというのが難しくなる。

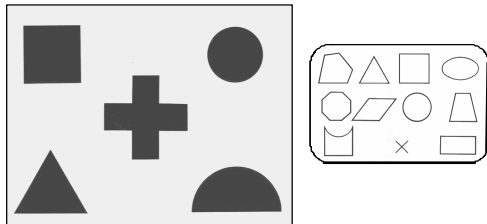


Fig. 9 視覚認知

次に紹介するものもよく出てくる課題であるが、絵の中に動物が隠れているというものである (Fig. 10)。私たちには図と地が浮かび上がって大体見えるのであるが、こういうことがとても難しい人たちもいる。そうするとやはり、先に環境の調整ということ述べたが、できるだけ見分けが難しい人たちにはしっかり浮かび上がってくるような調整をしていかななくてはいけない。

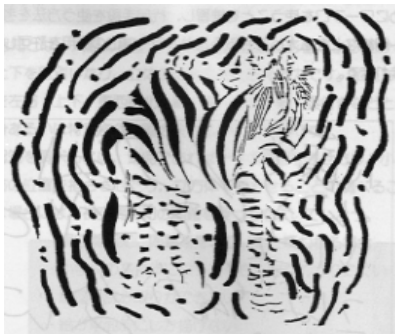


Fig. 10

聴覚でもこのようなことはたくさんある。たとえば私が「あ」といった場合、一瞬で文字のようなものが視覚的なイメージとして聞き手の頭の中に知覚される。しかし、実は「あ」というのは私なので、私の身体を楽器として使って「あ」というているわけである。そうすると、たとえば「ぱ」というためには実は時間的ないろいろな変遷があるわけである。どういうことをしているかということ、「ぱ」の場合には、唇を両方閉じて、そこでいったん呼気を留め、ポーンと開いて爆発させて、そのあとで声帯を

「あー」と振動させる、ということを私たちは無意識のうちにやっている。これは破裂音というのであるが、他には「た」というのはどうやってやるかということ、唇は閉じずにどこに息をためるかということ、歯茎の裏側に舌を置いてためておき、一瞬のうちに「た」というているわけである。また、「か」はのどの奥のところであったん呼気を止め、「か」とするわけである。従って実際の音というのは細かく聞いて見ると、時間的にそういった動作がばらばらになっている。「ぱ」と発音した場合、「ぱ」の後ろの部分はもちろん「あ」の音である。耳で聞くときに、「ぱ」「た」「か」というのは全部一瞬のうちに聞こえてくるように思われるが、実は時間的にずれたものの成分が寄せ集まって、それが聞こえてくると「パ」という音になり、「た」という音になり、「か」という音になるわけである。そのあたりをしっかりと聞き取れるかどうかということも、感覚の問題と脳の中でそれをどう処理するという問題に関わるものである。「さ」と「しゃ」というのは「す」という音が先行して、「さ」と「しゃ」がきこえてくる。このように音を聴くということについても、いろいろな音が耳に入っているから、すなわち音があるということがわかっているから可能になってくる。それでは、「ぱ」と「か」、「さ」と「しゃ」の違いがどうしてわかるかということ、自分が発音したりとか、人の声を聞いたりとかしながら聴き方というのが育ってきたわけである。だから、最初のアンテナ、すなわち感覚の部分をしっかりアセスメントしていくことは、聞き間違いが多いとか、明瞭度・発音がおかしいという時に、それが運動の問題なのか、それとも聞こえの問題なのかというようなことを調べるためにも必要なことだと思う。

もうひとつ、今度は認知の能力というところをちょっと考えてみたいと思う (Fig. 11)。先に述べたように、信号というのはその人が示したい意味を何かの記号に置き換えているものである。それをつかって、言葉だったら言葉、身振りだったら身振り、図形シンボルだったらシンボルという形でつかうわけであるが、この意味と記号の関係性というのをどう私たちは認知しているのだろうか。意味と記号の関係性・関連の仕方というのは、色々なレベルがある。たとえば、男女の区別示すようなシンボルというのは、もともと視覚的な形が似ているという視覚的な類似関係というものをもっている。この関係性が理解できればこういう記号を

使うことはできるが、この関係性が理解できなければ、写真とか実物とかというところで示していくということになる。

また、知覚的な関連性というものもある。たとえば、電話の「ツーツー」という音は、話中ということを示す音である。ただ単にそれは電話を示すということではなくて、話中であるという関連性、知覚と音と意味の関連性である。これらのことが理解できる人には、こういった関連性をもった記号を使うことができる。たとえば、チャイム音を鳴らすことで、「今からお休みの時間だな」とか「給食の時間だな」とかというようなことがわかるということであれば、チャイム音のような音をつかうことができる。信号の色や交通標識なども同じである。しかし、これらはどちらかというところ1段上のレベルの関係性となる。言葉を発しているときに使っている音声とか言葉、文字というものになると、さらにこの関係性が難しくなる。本来、犬とか猫とかいうのは、/inu/、/neko/という音とは関係性がまったくない。英語だったら「いぬ」といってもわからない。



Fig. 1 1

このように、本来の意味と使われる記号の間にあまり視覚的な関連性がないようなものを私たちは使っている。それを操れるだけの認知能力をもっているわけがあるが、これは非常に複雑なおよび高度な認知レベルがないと難しいわけである。さらに、その犬とか、動物であるとか哺乳類であるとかというような階層的な関係まで私たちは理解できるが、こういったこともある意味、発達の中で非常に高度なことを私たちが獲得してきたということになる。類似性の知覚とか、関連性の知覚とか、相手が示しているものをきちんとみてとれる、何について

それを言っているのかというようなことを読み取れる力とか、シンボルを操ったり、言語を操ったりするとき大事なことだといえる。もちろんこういう能力の基礎となるものは先に述べた感覚とか運動とか、それから記憶の能力も関係する。

私は子どもたちの言語発達、言語獲得を研究しているが、いろいろな不思議なことを子どもたちはいとも簡単にこなしている。たとえば、次のようなことがいまだに研究の対象になっている。ある探検家が未開の地に行き、まったく言語の通じない原住民にあってという状況があったとする。その原住民が向こうのほうに跳ねている野うさぎを指さして「カバガーイ」といった。さて、「カバガーイ」というのは何かの名前であろうということは推測できるが、うさぎの耳のことを言っているのか、しっぽのことなのか、跳ねているということなのか、それともウサギが好きなにんじんのことをいっているのか、といろいろ考えられるわけである。私たちは、言語を獲得していくときに、そうやってなにを指しているかわからない場合にも、うまく皆と共通のラベルを当てはめていくことをしている。そういう関連性というのは、やはり言葉を操る意味ではとても大事なことである。ただし、そのあたりの認知能力が未熟な人に対しては、関連性のレベルをより強い関連のあるものに落としていくという、私たちスタッフ側の歩み寄りが必要である。

次に紹介するのは、朝日新聞に毎週掲載されている「子どものつぶやき」というコーナーからのものである。たとえば、2歳児は大きな馬を指差して「わんわんおおきいね」といったとある。したがって、2歳児は犬も馬も4つ足のものは「わんわん」という関連性を理解しているということになる。3歳児は牛乳とジュースを交互に飲みながら、「しましまにのんでるんだよ」と言ったとある。これも非常に面白い。それはなぜかということ、「しましま」という視覚的なイメージと、順番に飲むということに関連付けている。図形シンボルを使っている場合、抽象的な言葉を図形に示さなくてはいけないのであるが、視覚的イメージと抽象事項を関連付けることができるということは、しましまの図形を見せることで順番ということを伝えることができるということである。つまり、3歳児レベルであれば、もしかしたらしましまの図形シンボルを使えるかもしれない。4歳児になると、「おじいさんになるかしら」といいながら恐



る恐るお菓子の箱を開けたというエピソードがある。これはおそらく浦島太郎のお話の状況を思い出して、それと関連付けて考えているのだろう。さらに6歳児になると、プラネタリアムにいった日の夕食場面で、「ぎょうざっていう星座あるのかな」とつぶやいたとある。この関連性にいたっては、恣意的な言葉である餃子の「ざ」と星座の「ざ」、オリオン座の「ざ」という音の形がきちんとわかっていて、その形があっというところで結び付けて考えている。このころになると、しりとりなどができるようになるため、そういう意味では言葉、音声言語を使っていける歳だということがわかる。このように、実際に目の前にいるコミュニケーション障害の人たちがどういう関連性理解のレベルにいるのかということを知ることは、どういうサインのシステム、あるいはシンボルのシステムを使うとよいかを判断するときの大きな助けになると思う ( Fig.12 )。

- |              |          |              |
|--------------|----------|--------------|
| • 実物         | • ジェスチャー | • 声の抑揚       |
| • 写真         | • サイン    | • 語構造の分節化と記憶 |
| • 絵 (抽象度レベル) | • サイン連鎖  | • 語の音形       |
| • 図形シンボル     | • 手話     | • 語の連鎖       |
| • シンボル連鎖     | • 指文字    |              |
| • 文字         |          |              |

Fig. 1 2 関連性の認知レベルは？

たとえば視覚的なものでいうならば、まず実物が一番関連性が高い。写真や、絵であっても写実的な絵から抽象度の高い絵まである。さらに抽象度が高くなると、図形シンボルなどになるし、今度はシンボルをいくつかつなげて文章を作ったりということができたりする。さらにもっと複雑な形の文字というのも扱えるようになる段階がある。動きの知覚でいえば、写実的なジェスチャーからサインになり、サインをいくつかつなげてメッセージを作る。さらに複雑な手話があり、指文字というのもある。それから、音声でいえば、声の抑揚のようなもので状況を理解したり、さらにはしゃべっている音声を単語の数珠として聞こえてくるように分節化することができたり、それを記憶していくというようなことができたり、餃子の「ざ」と

星座の「ざ」がわかるように言葉の単語の音形がわかったり、さらに単語を連ねて文章をつくっていくことができたり、ということがある。これらのことがどういうレベルでできるのかということで、支援の仕方というのが導かれてくるのではないかと思う。

シンボルとか、サインとかいうシステムは色々開発されている。コミュニケーション機器を使うかどうかとか、使う場合に視覚、聴覚、動きのうちどういうものを使うのかとか、一方のコミュニケーションに使うのか、それとも双方向のコミュニケーションに使うのかななどというようなことが大事になってくるわけである。たとえばマカトンサインなどは動きを使ったシステムである。手話から作られたものなので手話に非常に近いのだが、「待つ」とか「我慢する」とか、「熱い」、「冷たい」、「寒い」というサインを音声言語と併用していくことによって、理解を助けることができる。それから、言葉がうまくしゃべれない人たちは、こういった身振りをするのでうまく伝えられるということがある。他に、動作ではなくて、図形シンボルのシステムもある。PCSといわれているものにはソフトがあって、ソフト上で図形シンボルを作っていくことができる。中には非常に抽象度の高いシンボルもある。今は、インターネットでいろいろなものをダウンロードすることができる。たとえば写実性の高いかわいらしい絵もインターネットでフリーでもらってくることもできる。こういうものをもらってきて使ってみるということもできる。記憶を助けるという意味でも図形シンボルをつなげて使うことができる。作業の順番どおりにつなげ、それを見ながら行なうことで複雑なこともできたりする場合がある。ほかのフリーのソフトには、コミュニケーションボードを作ることができるものもある。ホームページ上で作って、手持ちのプリンターでプリントアウトすれば、コミュニケーションブックができてしまう。大きさも自由に変えられるので、大きいのがよいか、選択肢が2つ3つのほうがよいという場合には自由に変えることができる。そういったことができるような時代になったわけである。(2003年12月20日、第2回研究大会教育講演会加筆修正)